令和5年度　第1回ふくしま元気トーク　まとめ

【 開催概要 】

日　時	令和５年８月２６日（土） 午後１時３０分～３時
テーマ	誰もが健康で安心して暮らせるまち　ふくしま
場　所	街なか交流施設　ふくふる
出席者 （福島市）	【福島県立医科大学】大塚遥奈さん、菊田奈那さん 【大原看護専門学校】古山ゆりかさん、高原かえでさん 【福島看護専門学校】土屋幸之助さん、佐藤千桜莉さん 【福 島 学 院 大 学】佐藤愛花さん、千葉耶映さん 木幡浩　福島市長

【1　市長あいさつ】

　コロナで本当に社会自体も変わりました。健康あるいは命の安全に対する大切さが認識できたと思うし、我々行政もその分野って本当に大事だなということを、改めて確認したと思います。
　そして、この状況の中で人口減少が加速しています。それに対する対策として、１つは安全・安心、２つ目は子育てと教育、３つ目は産業振興、４つ目はにぎわいと文化と考えています。そして、これらに絡めて女性の活躍、デジタル化、ゼロカーボン化といった将来を見据えた変革が大事だということで進めているわけですが、最初に安全・安心が来ているわけです。
　今、移住も非常に強く取り組んでいかなければならないのですが、移住する人からすると、例えばお年寄りなどは、ここの土地いいねと関心を示しても、最後の段階でやめたというのが結構多いのです。なぜかというと、そういうところに限って医療が乏しいのです。そうすると安心して暮らしていけないなというので、諦めて移住をやめるというケースがあるんです。それから、いざというときに、子どもたちの面倒をどうやって見ようかという不安が少ないところを選ぶだろうと思うし、その点では、本当に医療とか福祉というのは、安全・安心の特に要の分野だろうなと思っています。
　これだけ需要があるにもかかわらず、今、医療・福祉の分野は人手不足になっているわけです。医療・福祉を充実させる上で、人手不足というのは大きなネックになっているわけで、これからそちらに向かって歩んでいこうとする皆さんの意見を聞かせてもらえたらなと思っています。

【2　主な発言内容】

（１）医療人材の確保について

○大塚遥奈さん（福島県立医科大学　看護学部　４年）
　仕事の続けやすさがとても大事だと思っていて、自分でスキルアップしていきたいという時に、出産、育児、仕事との兼ね合いがやっぱり難しいと思うので、病院の中で子どもを見てくれるところ、安心して子どもを預けられるような場所が増えたらいいなと思います。

〇菊田奈那さん（福島県立医科大学　看護学部　４年）

育成の段階で、患者さんとかご家族の方に温かさとかを与えられるような看護師を育てていくと、そこで会った人がいいなという人が増えるのかなと思ったのと、私が高校生の時に大学の方が来て、医療の現場を実際に語ってくれるという機会があったので、それまで医療とあまり関わりがないという人も医療の世界に触れられる機会があったらいいのかなと思いました。

〇古山ゆりかさん（大原看護専門学校　看護科　２年）

両親の近くで子育てしたいと思うのですが、皆が皆、両親に助けを求めることができるとも限らないので、預けられるところの確保と、子どもを育てる上で幼少期は愛着の形成など重要な時期でもあるので、職場としてお子さんがいるお母さんに対する労働時間の短縮の理解や、労働時間が短縮したことによって下がる賃金を補えると、子育てする側は嬉しいのかなと思います。

〇高原かえでさん（大原看護専門学校　看護科　２年）

実習に行った時に、力を使う場面がたくさんあったので、医療用ロボットだったり、力仕事に代えられるような何かをつくったりできたらいいなと。もう一つが、看護師という職業について、すごく大変そうというイメージが子どもたちの中にあると思うので、学校などで、患者さんとのつながりや、やりがいもすごくある仕事だということを、未来のある小学生とかに話す機会があると、より興味を持って、将来的に人材の確保につながるのではないかなと思いました。

〇土屋幸之助さん（福島看護専門学校　３年）

病院の新人教育の手厚さが重要と考えていて、就職して１年目となると、病院に慣れることも大切だし、どのように教育してもらえるのか、どのような支援があるのかは大事だと思います。他にも、将来自分が認定看護師になったり、さらにキャリアアップを目指したりする際の教育などでも、支援してもらえると安心できる上に、なりたい自分になれるというところは、仕事に対するモチベーションになるのかなと考えているので、手厚い支援があると、医療の側に行ってみようかなという人も増えるのかなと考えました。

〇佐藤千桜莉さん（福島看護専門学校　３年）

教育体制がしっかりしているところとか働きやすい場所だと、安心して働き続けられるなと思います。保育所が設立されている、休暇を取りやすい、人間関係で助け合いができれば続ける人も増えてくる。そして、続ける人が増えると新人教育もしやすい。さらに、経験が長い人が教えることによって、新人さんもスキルアップしやすいだろうなと思います。

また、お祭りとかマラソン大会とか、イベント会場で医療を身近に感じていただけるような、血圧測定とかの場所をつくって、地域の方にも身近に医療のことを知ってもらったりするのもいいのかなと思います。

〇佐藤愛花さん（福島学院大学　福祉学部福祉心理学科　１年）

社会福祉士と精神保健福祉士の国家資格を取るために今の大学を選んだのですが、実習を重ねていくと、やっぱり自分には大変だと思ったりする学生もたくさんいて、国家資格を受験して受かるという人は本当にごく一部になってしまうのが現状で、人材が確保できないのは、それが原因なんじゃないかなと思っています。でも、福祉の重要性をちゃんと理解すれば目指す人も多くなるのではないかなと思うので、所属している「心のバリアフリー」推進隊の活動を通して、若い人に広めるのが一番効果的だと思っています。

〇千葉耶映さん（福島学院大学　福祉学部福祉心理学科　１年）

公認心理士という職業に関心があるんですけれども、大学院進学となったときにまたお金がかかるので、職業によってこういう仕事があるというのをしっかり分かっていないと、その職業に進むに当たって厳しくなってくるのかなと思っています。

市長	○いわゆる院内保育所みたいなものはコロナの前まではかなり増えていました。今後、人手不足の中で人材を確保する上では、企業内保育所というのは大事だなと思っています。 病院でできるところはそれでいいし、そうじゃないところは共同でやるというのも一つの手だなと思います。行政も、できる限り延長保育とか便利な保育のやり方というのをつくっているところですが、看護師さんの働き方に対応できる保育所的なものは、特に必要なのだろうなと思います。今までイレギュラーな保育というのは、あまり公立はやっていなかったのですが、今後は公立もそういう役目を果たしていこうかなと思っています。 ○何事もロールモデルというか、こういう人になりたいなというような人が出てくれるとありがたいですよね。話す機会は、学校の協力をいただいて、もう少し作れるようにできたらと思いました。 ○福島市の場合、両親が近くにいる人が多いみたいで、ほかの地域以上に両親の助けをもらいながら結婚生活をしたい人が多いみたいです。それはそれでいい強みだと思うし、できない人には、できないなりのサポートが必要だろうと思います。 ○幼少期にできるだけ子どものそばにいる、病院の中でもせめて５歳になるまではとか３歳まではとか、一定の目安を作って子どもと親の触れ合いを作ってあげるという配慮はやっぱり要るのかなと改めて思いました。賃金は、制度としてできればいいですけれども、働く時間に見合った賃金ということになっちゃうから、ちょっと難しいかもしれません。 ○福島市ではベンチャー系企業が進出していて、マッスルスーツを作っている企業も大笹生に来ています。そんなこともあって、ぜひロボットの関係も産業振興と絡めて先進的に取り組んでいきたいと思っています。 ○医療系の人ってすごく向上心があって、どうやって自分として進んでいけるか、サポートしてくれるかというのを重視しているなと、改めて感じました。 ○前に大原総合病院が、上町テラスの２階で年１回イベントをやっていたのですが、すごく多くの人来ていてびっくりしました。ふくしまシティハーフマラソンは、ハーフであんなに手厚い体制取ったのはあまりないんじゃないかなというぐらい充実した体制だったと思いますし、市役所も医療系の職員がいますから、そういう体験の場をつくるというのも一案ですね。

（２）医療・福祉の連携、医療・福祉の充実・強化に向けて

○千葉耶映さん

最近の話ですが、すごく元気そうな高齢の方が道を車椅子で歩いていて、すごいなと思ったんです。でも、見ていてすごく危なくて。道はデコボコだし、熱中症の危険もあるし、何で出歩いているんだろうなと。高齢者が独りで生活はできるけれども、すごく危ない状況になっている。数メートル離れたお店に行くのにも、車椅子があったら行けるけれども、それって本当に安全なのかなと。でも、その高齢の方が運動として行っているかもしれない。そうすると何が正解なのかなと思いました。

○佐藤愛花さん

医療従事者、福祉関係者が、何を一番重要と考えて、どこを尊重すればいいのかなど、専門職の分野として一番大切なことを考える機会が、職に就いてからももっと増えるといいのかなと思っています。

○佐藤千桜莉

地域に住んでいる健康な高齢者を増やすために、元気な体をつくる場を設けたりして健康な人をもっと増やしていく、疾患を持ってしまった人は回復したところの維持をしていく、という取組も必要なんじゃないかなと思います。あと、高齢者が病院に行くにも補助がついたり、飯坂線やバスも高齢者の方だと無料で乗れたりしているので、限られたお金を使いながら、そういうのももう少し充実させていったらいいのかなと考えています。

〇土屋幸之助さん

高齢者の方が自分で自分の健康を確保するとか、健康な体をつくるという意識がすごく大事だと思っていて、１次予防として、例えば自分の血圧が正しいのかどうかを知ることや、自分の食生活はどうなのか、健康の意識付けの部分で、もう少し何か働きかけるところがあればいいのかなと思いました。

〇高原かえでさん

高齢者の方だとしたら、地域でグループを組んで、スタンプラリーとかイベントの機会をつくったりすると、地域との触れ合いにもなるし、より参加しやすく運動にもなるし、いいと思っています。

福島市でいいなと思うところもあって、私には今５歳と４歳の弟がいるんですが、サポートも手厚くて子育てがしやすいというふうに母が言っていたので、そういういいところをどんどん伸ばしていって、子育てのしやすい市になるといいなと思いました。

あとは、緊急のときにどうすればいいかというマニュアルなどをつくってＡＥＤは街のどの辺にあるのかが分かると、もっといいのかなと思いました。

〇古山ゆりかさん

医療の点では、家に居ながら診療ができるように訪問看護と連携を取りながらできると、病院としての負担も減らすことができるのかなと思ったのと、福祉という点では、お母さん同士が交流する場とか、お母さんが少し息抜きできる場などがあると、子育てするお母さんは嬉しいのかなと思いました。

〇菊田奈那さん

小学校とか中学校とか、そういうところは行政も入りやすいと思うので、健康教室とかを開いて、お子さんから親に、それからその親にというような形で伝えていくことが大切なのかなと。幼い頃から健康意識を醸成していくのも大切なことなのかなと思いました。

〇大塚遥奈さん

４年間の学習と実習などを通して、意外と福祉とかと看護師の連携ってあまり取れていないのかなと思っていて、この職業同士で話す機会というのが意外と少ないのかなと思ったことがありました。人手が足りないとか、介護士も看護師もお互いに忙しくて、一人一人の患者さんに取れる時間が少ないというところも問題としてあって、そういうところも改善できたらいいかなと思います。

市長

〇バリアフリーをもっと進めなきゃいけないんだろうと思います。高齢者の足の確保ってすごく大事なんですけれども、一方で、東京だったら歩いて当たり前の距離を、こっちはみんな車使う習慣になっていて歩かなくなっちゃうんですよ。300m、500mぐらいの範囲を、本当に歩けない人は別としても、そうじゃない人の分まで全部行政で確保するといったら、お金がかかってしようがない。だから、皆さんに歩く習慣をつくっていうように言っているんです。その点では歩きやすい環境をつくってあげるというのは大事かなと。羽黒神社があるじゃないですか。あそこって健脚の神なんです。そういう神様がいるなんて、他にはないじゃないですか。わらじまつり、あるいは健脚にちなんだイベント、こういったものをひっくるめて、まず健脚のまちというのをつくれるんじゃないかと思うんですよね。

〇ホームページで例えばＡＥＤ福島と検索するとぱっと出てくるとか、そういうのを皆さんにお勧めしていかなきゃいけないな。

〇医療職とか専門職の方って、中身をすごく重視されるんですよね。あるいはスキルアップを。だから、地域の医療とかが遅れているところよりは、進んでいて、あそこの医療すごく面白いよねとか、興味持ってもらえると、医療人材って確保しやすいんだろうと思っているんです。これまで福島市は、どちらかというとそういう先端的な分野やっていなかったけれども、今回、救急車で12誘導心電図を県内でもいち早く、去年の秋から付けました。まさに救急は、一番市民にとって重要な分野だから、非常に重視して、むしろ進んだことをやりたいと思います。やっぱり地域の強みになる医療・福祉のモデルを進めることによって、医療とか福祉に関わる人がやりがいを持って参入してもらえるんじゃないかなと思っています。

○お金の心配してもらったのはありがたいですね。やっぱり何事も限りがあって、限りある中でどうすればそれを最大限有効に使えるかというのが、工夫のしどころなんです。何でも無料にしちゃうと、結果的にはその部分しかサービスっていかなくなっちゃって、ある一定の人だけが得して、そうじゃない人がうまくいかない。現実に高齢者の無料サービスは、飯坂線とかを使える人はいいんだけれども、使えない人は全然恩恵がないことになっているんです。その辺はいろいろ工夫して、皆さんに使ってもらえるものにしようと思っています。

○ももりん体操は、やっている人もいるんですけれども、コロナでだいぶ後退しちゃったので、改めてやらなきゃいけないと思っています。福島市も健康の都と書いた健都ふくしまというのを標榜して色々とやっていますので。

○保育だったら一時保育やファミリーサポートセンターで、一時的に預かってもらったりもできるし、今回、新しく始めたのは、保育所とか幼稚園へ行く年齢でも家で育てたいという人もずっと子どもを見っ放しだと大変だから、週に一、二回預かれる取り組みです。これは、今年、全国31自治体で始まったんですけれども、福島市が県内では唯一取り組んでいます。社会的にその手の仕組みというのはかなりあるし、お互い同士の助け合いでもいける部分もあるのかなと思うんですけれども、本当に困った人の声を聞きながら、どういうメニューが提供できるかというのは考えなきゃいけないかなと思います。

○子どもたちにうまく働きかけると、そこにひもづいて親、おじいさん、おばあさんも出てくるので、うまく子どもたちにアプローチできるといいのは確かなので、我々の工夫のしどころですね。

○人手不足の中で、その人に寄り添って濃密に対応するというのは、やりたいけれどもできないのが現実だと思うんです。それを補うのが、医療連携というか、情報化だと思うんですが、今度マイナンバーカードでもできるんです。マイナンバーカードで既往歴を読み込んで、この人はこういう既往歴があるから、病院ではこういう対応をしましょうかとか、そういうのがもう始まっているんですね。ぜひそういった形で患者に寄り添って、かつ、より効率的にできる仕組みをもっと作りたいなと思っているんです。

（３）若い世代から見た福島市

○土屋幸之助

若者が休日とかの時に遊べる施設とかショッピングモールというのが１個あってもいいのかなと思いました。

○佐藤千桜莉

福島市はたくさん果物が採れておいしいので、福島市ならではの野菜とか果物を使ったカフェとか、若者が好きなおしゃれなカフェとかがもっと増えると、県外から、行ってみようとか。あとＳＮＳとかでの発信をもっとされていくといいのかなと思います。

○高原かえで

福島市は大きなショッピングモールとかはないんですけれども、歩いてみると小さくてかわいいお店は結構あって、知る機会があると行ってみようとなると思うので、ＳＮＳなどの情報発信をもっと充実させて、動画とかを使いながら発信すると、みんな行くようになるかなと思いました。

○古山ゆりか

インスタ映えするグランピング施設のような若者受けする施設があると、もうちょっと集客ができたり、地元の若い子たちとか、年配の方とかも楽しむことができたりするのかなというふうに思いました。

〇菊田奈那

夜遅くまでご飯とか飲んだりしていると、帰る時間が遅くなるんですが、休みの日に限って遅い時間までバスがないなと思うんです。もうちょっとだけ公共交通機関の時間が遅くまであると、そこでまたちょっとお金を使っていこうかなという気持ちにもなるかなと思うので。

〇大塚遥奈

高校時代よりは、おしゃれなお店とか増えて、すごく楽しめるまちになったかなと思いました。あと、道路とか、荒川の川沿いの土手とかもきれいになったなと思っています。

〇千葉耶映

中学、高校、現在もソフトボールを続けていて、日本リーグとか日米の試合とかであづま球場に行く機会があるんですけれども、車の運転免許もなくて、どうやって行こうみたいな。せっかくイベントがあっても、どうやって行くんだろうなと。もっと交通機関と盛り上がりがあればな、もっとソフトボールも広まったらいいな、という気持ちがありました。

〇佐藤愛花

大学入学後、福島市の大学１年生限定で、福島市内のパフェとかパンケーキとかパンとかが５００円で食べられるっていう券をもらって、学生が駅の近くのパン屋に行こうとなっているのも見てたので、もっとそういう事業が広まると学生ももっと駅を歩くようになるんじゃないかなと思いました。

市長

〇みんなはモールが楽しいと思うけれども、街なかは街なかでショッピングモールとは違った楽しさがあっていいと思うので、ぜひ皆さんに、この街なかで友達と歩いたりデートを楽しんでもらえるような、そんなまちにはしていきたいと思っています。

〇例えば果物で言っても福島市は加工品が少ないんですよね。あるいは、進物になるようなものとか、ファッショナブルなもの、そういうおしゃれなのがなかったんですよ。だけども、今だいぶ増えてはきているんです。今ピーチホリデイというのをやっていて、いろんなところで桃を使ったスイーツをつくったり、そういうのがだいぶ増えてきました。

あとは、昨年度魅力アップ支援事業というのをやって、お店も旅館も魅力づくりやってくださいと支援したんです。これからまたどんどんやりたいと思います。あと、街なかも家賃補助とかリフォーム補助をやっているので、コロナでつぶれる店も多かったんですけれども、今は店も非常に増えています。

〇ＳＮＳも、我々が発信するよりも皆さんに発信してもらったほうがいいんだよね。だから、魅力アップ支援事業を、ぜひインスタ映えをするようなものをつくってくださいと。そうすれば、おのずと消費者の皆さんがそこに行って写真を撮ってアップしてくれるから、そういうことで進めたいなというように思っています。

ただ、一方で、テレビもなかなか強烈なんだよね。だから、福島市では朝ドラをきっかけにロケツーリズムというのをやって、東京へ行っていろんなプロデューサーに会って売り込むんです、うちでロケしてくれと。そうしたら、映画のロケもあればテレビ番組とか、あるいはバラエティーのロケもあるわけですよね。いろんな面で情報を発信していきたいと思います。

〇キャンプ系の施設は、ちょっと手を入れます。福島市というのはただのものが多過ぎて、後になって良くないとか、全然手を入れられないとか、あるいは、他のサービスが全然動かないみたいなことになっているから、そこの部分はちょっと見直しながら、より良いものをつくっていきたいと思っています。

〇それなりに人がいないとバスの経営が成り立たないわけだよね。だから路線ごとに見ているわけです。利用者に応じて本数増やしたり、あるいは遅くまで運行したりとかね。そのためにもやっぱりまち自体の活性化をしなきゃいけないので、何とか頑張ります。

〇ソフトボールはオリンピック競技で開催されたから、聖地として振興を図らなきゃいけないと思うし、あと、ああいう大きなイベントのときには駅からシャトルバス出ているので、あとはとにかく駅に行ってもらうというのが大事なんだろうなと思います。
〇もうちょっとしたら自動運転が始まると思うんですよ。そうなると多分これまでのいろんな問題がかなり解決してくると思うんですよね。タクシーにしても、バスにしても何がやっぱり問題かというと、車両以上に人件費なわけです。人がいないと動かない。だけれども無料で全部やれるということになると、車をみんなで共有するから、コストも低くできるし、世の中変わると思います。その際にはどんどんと早めに食いついてやろうかなと思っているんです。
〇学生時代の経験で言うと、学生って、学生なりの楽しみみたいなものがあるでしょ。ところが、福島市はあんまりないんだよね。例えば福大。周り何もないじゃないですか。医大にしても、近くに最低限のスーパーがあるくらいで、学生たちが堪能するっていう雰囲気じゃない。学院大の周りも、本校舎のほうも、キャンパスはすごく綺麗なんだけど、周りにはやっぱりないですよね。だからもうちょっと大学の周りも、学生たちがあそこでよくたむろしたなあとか思えるようなそういうまちづくりをしたいなあと思ってるんです。大学とか看護学校がないと、人を養成する機関もなくなっちゃうし、若い人も定着しない。その点では、皆さんが今学んでいるようなところを守ること自体が、僕はまちづくりのすごく大事な要素だと思ってるんです。その場合、大学とかを助けることも大事なんだけども、それだけじゃなくて、学生さんがあそこで楽しかったなあと思い出に残るようなものも大事だと思ってるんで、今後少しでもそういったことを進められるように頑張っていきたいと思ってます。

３　まとめ

今日はそれぞれ行政の担当者も来ていて、皆さんから生の声を聞けたというのは非常に参考になったと思うし、私自身も非常に、また改めて認識をさせていただきました。皆さんはこれから福島市の医療・福祉を担ってもらえる方々なので、今後皆さんがしっかりと職場で福島市の医療・福祉を支えられるように我々も頑張るのと、あとは、皆さんのあとに続く人がもっともっと増えて、皆さんの仕事が仲間とともに充実するように努力をしていきたいと思っています。